

湖西歌舞伎

◆はじめに

ふるさと研究のテーマを検討しているときに、私たちの住む湖西市にも伝統民俗芸能を継承する「湖西歌舞伎保存会」があることを知りました。

「湖西歌舞伎」という、伝統民俗芸能が継承されていることは湖西市民の誇りです。

「湖西歌舞伎」という名前は聞いたことがあるがよく実態を知らない、観たことがないという人が多くいました。そこで湖西歌舞伎について調べ、より多くの人に知っていただくとともに、なじみやすく、次世代に継承されるようにとの願いを込めてこのテーマを設定しました。

「研究の進め方」

- ・まず歌舞伎を知ろうと、3月に豊橋素人歌舞伎を観賞しました。
- ・湖西歌舞伎のルーツや一般知識を調べるために、図書館で文献調査や歌舞伎の学習をし、地域の民俗文化研究者、湖西歌舞伎



第40回湖西歌舞伎

◆湖西歌舞伎ルーツ(起源)の調査

私たちは、湖西歌舞伎のルーツである地芝居、万人講について、湖西市各地域に伝わる神社や旧庄屋の古文書や台本、常設舞台などについて民俗文化の研究者に話をお聞きしました。

文献も調査して、なぜ今、復活・保存・継承されるようになったのかを探ることにしました。

「新居地域」

新居地域の歌舞伎について、海鳴学園講師の鈴木芳朗先生にお話を伺いました。先生は人形浄瑠璃の台本を書いて芝居の演出をされていました。歌舞伎については、叔父さん(儀三)が戦前に万人講芝居をしていたとお聞きしました。

新居書留帳に、明治時代の歌舞伎役者6世沢村宗十郎の弟子で女形の沢村いずみが、新居町出身の鈴木加六郎さんであるとの記述を見つけました。明治5年に18歳で弟子入りして40歳過ぎ(明治27年頃)まで役者をしたあとに新居に帰りました。それから歌舞伎に関与されたかは分かりませんでした。

また書留帳には次のような記述がありました。

「昭和10年頃、泉町のタガ清のとめさんを中心にして、10人ほどで万人講『新居歌舞伎』をつくりました。年2回くらい地元新居、鷺津の大国座、入出座、雄踏、ときには学校の講堂を借りて歌舞伎十八番物を主に上演しましたが、木戸銭十銭では赤字の時もしばしばだったそうです。そして戦争も近づき、だんだん観客の入りも少なくなつて、上演もされなくなりました」。

湖西歌舞伎第1回公演のプログラムに、戦前の新居歌舞伎メン

保存会の方に話を伺うことにしました。

- ・湖西歌舞伎の見学や体験を通してテーマに迫ろうと考えました。

◆歌舞伎とは

歌舞伎は、江戸時代の庶民文化をもとに成立した古典演劇のひとつで「能、浄瑠璃」とともに日本三大古典劇とされています。

起源は、江戸時代初期の一六〇三年に出雲阿国が、京都の四条河原で舞い踊った「かぶき踊り」だといわれています。

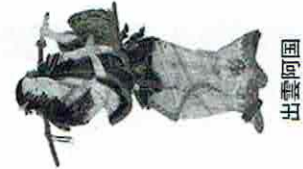
歌舞伎の名称のいわれは、奇抜、奇妙な格好や振る舞いを意味する「傾く」が語源とされています。

歌舞伎役者による大歌舞伎とは別に、日本各地に農村歌舞伎(素人歌舞伎)があり、地芝居・万人講と呼ばれ、地域に根付き伝統を現在に継承しています。

「地芝居」とは、氏神様の祭礼の奉納行事として演じる芝居のことです。村人たちが力を合わせて祭りを盛り上げるために行われるものです。

「万人講」とは、地芝居の経験者や歌舞伎に興味のある芝居好きの人たちが集まり、講(団体)をつくって歌舞伎を演じるものです。「湖西歌舞伎」は、この万人講に該当します。

地方で素人が演じる地芝居・万人講芝居の多くは、大歌舞伎で演じられている演目を、振付師と呼ばれる大歌舞伎の元役者や、旅芝居の役者の流れを汲む師匠の指導で演じています。



出雲阿国

バ1の方の名前があり、新居との繋がりが見えました。

また、戦前の新居歌舞伎には、芝居好きの湖西の人も2、3人参加していたと書いてありました。この方たちも戦後、湖西の万人講に参加して、湖西歌舞伎復活に繋がる下地になったと思われるます。

「鷺津地域」

次に鷺津ではどうだったか探ってみました。

現在の湖西歌舞伎は、しばらく途絶えていて昭和54年に発足、復活したのですが、意外とルーツは古いことが分かりました。

八幡諏訪神社所蔵本に40数点の台本があり、なかでも年次の判明する幕末の台本が3点見つかっています。

「新藩雪物語・兵衛屋敷の段」「田村磨鈴鹿合戦・平治住家の段」「八百屋お七」の3点で、その台本の一部には、

「河原ノ若社中」という記述があり、河原地区の青年たちによって演じられた地芝居だったと判ります。

このことからこの河原地区においては、一八三二年から地芝居が盛んになったものと考えられます。

しかし、ささやかな庶民の娯楽は次第に演ずる人も少なくなり、だんだん廃れていきました。

ところが大正7年、鷺津駅前に大国座劇場ができ、劇場の落成とともに復活の兆しが見え始めました。



八幡諏訪神社

大國座は芝居小屋と言われていましたが、決して小屋ではなく歌舞伎芝居が上演できる定式通りの建て方の劇場でした。舞台下手から張り出した花道、客席は全部畳敷きの枱席でした。

当時流行していた歌がノンキ節、コロツケの歌などです。

大國座では地方まわりの芝居が上演されており、そこから地元の芝居好きの人の中に、くすぶっていた万人講の火が燃えだしました。

まさに大國座が火付け役となり、時を経て昭和23年春、万人講が再び大國座の舞台上で上演され、昭和27年までは年2回、その後、昭和30年までは年1回上演されました。娯楽の少なかった時代であったため、知っている人が出るということで人々は仕事を休み、お弁当持参で見物に出かけたものでした。

やがて時とともに世の中が落ち着き、物質の豊かさが増すことにより、人々の楽しみ方も大きく変化して、昭和30年に大國座ついに閉館となりました。せつかく復活した万人講でしたが、発表する場所を失い、しばらくは中止せざるを得なくなりました。

昭和35年と36年には、鷺津中学校の講堂を借りて上演され、その後途絶えていましたが、昭和50年に竣工間もない市民会館を借りて上演されました。

そして市内各地域で芝居の火を絶やさず守ってきた人たちが集まって、昭和54年に湖西歌舞伎保存会が結成されました。



万人講の興行が上演された大國座

「知波田・利木地域」

江戸時代の終り頃には、どの地域でも集落ごとに祭礼の奉納行事として地芝居が催されていました。利木村では、吉原家文書「年表残欠」で一八一〇年頃に「利村狂言三付、御出役御迎」とあり、すでに今から二〇九年前には利木天神社で地芝居が行われていたことが伺えます。「狂言芝居が行われるのを見に来てください」という意味です。

また、一八五六年利木村の庄屋 吉原弥次右衛門手控覚書の中に、この年雨が幾日も降らないので、知波田・入地区の仲間の人たちが近江の多賀神社に雨乞いをし、願いがかなったのでそのお祝いに、横山の若い衆が利木の閑田寺境内で地芝居を演じたということです。

その後については史料がなく分かりませんが、現在湖西歌舞伎の練習が利木の公会堂で行われていることは、地芝居からの繋がりを強く感じます。

利木の公会堂はこの地域では珍しい造りで、芝居もできるように舞台も観覧席も設けられています。それまでは、祭りの余興といえば芝居などの演芸が中心で、お宮やお寺の境内に仮設のステージを作っていた行っていました。



守田先生に、農村歌舞伎についてお話を伺う



天神社 利木



公会堂を建て替える時に、「芝居ができる舞台を常設して文化の拠点づくり」を目指して昭和28年に落成しました。この年代は、青年団活動が活発に行われ、祭りの余興、地域の活動、奉仕活動、文化活動なども積極的に展開されていました。

私達も、今年6月に何回か練習の様子やステージ、客席の造りを見学し、雰囲気味わうことができました。

大知波には、大神山八幡宮境内に、明治25年6月の創建で通称、大知波座とよばれる「回り舞台」を備えた立派な「大知波の舞台」がありました。

ここで昭和3年に御大典記念行事として、大知波集落の人たちが地芝居を演じたのが最後になりました。



大知波 大神山八幡宮 回り舞台のあった芝居小屋 大知波座

湖西歌舞伎保存会からの「市指定無形民俗文化財」の申請を、教育委員会が鑑定を依頼した、静岡女子短期大学/佐藤彰教授の「湖西歌舞伎に関する鑑定報告書」が作成されました。「湖西歌舞伎は、市指定無形民俗文化財として指定する価値はあるが、指定に当たっては幾つかの条件整備を必要とする」とあり、その条件の一つに「湖西歌舞伎を大知波の舞台で行うことはどうか」と提案されていました。



利木の公会堂 外観



利木の公会堂

そして「より地域に密着したものに変わっていくためにも大知波の舞台での公演はかなりの有効性があるものと考えられる」と書かれていました。

昭和60年当時、農村歌舞伎の「回り舞台」は、静岡県ではほとんど例を見なくなっていたので、佐藤教授が調査した時点では「回り舞台」を修復すれば、将来にわたって使用可能な舞台でした。しかし、修復されることなく平成31年4月に調査したときには、老朽化によってすでに解体され、跡地は屋台収納施設になっていました。

文化財に成りうる貴重な施設を失い、まことに残念なことです。

「新所・入出地域」

新所の女河八幡宮は、一八四六年に現在の社殿に改築されて隣に神楽殿もありました。

昭和37年頃までは、芝居の上演、映画、歌などに使用されていましたが、その後しばらく作業場として使われ、今は解体されて更地になっています。

入出座は町中にあり万人講芝居の上演など利用されていましたが、昭和38年頃に廃館になりました。

知波田・利木・新所・入出地域では、このように江戸時代後期から祭礼の奉納行事として地芝居が行われていました。

その後、市内各地域の地芝居経験者が集って万人講をつくり、湖西歌舞伎の結成に繋がっていきました。



新所 女河八幡宮の神楽殿



◆湖西歌舞伎の変遷

調査の結果、湖西歌舞伎は湖西市内各地域で江戸時代後期に始まり、昭和初めまでの地芝居時代を経て、その後、市内各地域で盛んになった万人講へと繋がっていきました。民俗芸能の伝統を絶やすことなく脈々と伝えられ、湖西歌舞伎として定期公演を開催するまでになりました。

「代表的なでき事」

- ・昭和54年老人クラブ連合会の後援によって「湖西歌舞伎保存会」を結成
- ・昭和55年以降、定期公演を毎年開催
- ・平成6年より「三遠南信ふるさと歌舞伎交流」に毎年参加
- ・平成21年 第24回国民文化祭しずおか「農村歌舞伎まつり」に出演
- ・令和元年 第40回定期公演 6月23日(日) 新居地域センターで開催

◆湖西歌舞伎保存会の活動

消滅と復活を繰り返してきた万人講でしたが、今、湖西歌舞伎として地域に認められる存在になりました。湖西歌舞伎保存会は「万人講芝居」を復活、保存、継承し、その普及を図ることを目的として、次の活動をしています。



第40回湖西歌舞伎

◆歌舞伎のまめ知識

「演目の説明」

台本の表紙に書いてある演目の題名を歌舞伎用語で、外題といっています。外題には、本外題(正式名称)と通称(とおり名)があります。

通称には、さらにその「外題」の人気のある場面「段・場・幕」の通称が多くあります。

盗賊が主役を演ずる外題には、「白波・志ら浪」という名が付いています。

「歌舞伎の演出」

歌舞伎の演技は、父子相伝、子弟相承による演技がより洗練されて「歌舞伎の型」として継承されました。

そのなかの一部を紹介します。

「隈取」

荒事で見られる化粧法のことで、紅、藍、墨、茶の各色を用いて、顔に陰影をつける化粧で、「紅色」は善人、「藍・墨色」は悪人・悪霊、「茶色」は冷酷な非人間性を表しています。

「見得」

演技の中で感情が最高潮に達したときに、役者が一瞬行動を停止して絵姿のよくなって睨む場面を「見得」といいます。



隈取

このとき、観客に印象付けるために「ツケ」を打たせます。

1. 年1回の定期公演の開催
2. 三遠南信ふるさと歌舞伎交流に参加
3. 歌舞伎関連イベントに参加
4. 舞台道具の貸し出しと設置



農村歌舞伎まつり



舞台道具の設置風景

◆三遠南信・ふるさと歌舞伎交流

湖西歌舞伎の活動は、定期公演以外に平成6年から「三遠南信・ふるさと歌舞伎交流」に参加して、その主旨にあるように公演、交流活動を通して県境を越えた地域文化の振興に寄与しています。

飯田・浜松間に道路を通す、三遠南信道路建設国家プロジェクトができた時に、三遠南信地域に共通する

平成6年から参加
県境を越えた地域文化
振興に寄与

文化としての歌舞伎があったことで、その応援プロジェクトとして、平成6年より「三遠南信・ふるさと歌舞伎交流」が始まりました。三遠南信・ふるさと歌舞伎の立上げには、湖西歌舞伎代表の星川さんが他地域の保存会に働きかけるなど尽力されたそうです。



三遠南信ふるさと歌舞伎交流

三遠南信地域には歌舞伎保存会が全部で26団体あり、歌舞伎文化が地域に根付いていることがわかります。

「ツケ打ち」

舞台上手の端で、演技を強調する目的で「ツケ板」を拍子木で打つことをいいます。(バタバタバタ、バタン、バンなど)

◆定期公演

今年は節目の第40回公演でした。

公演の1か月前より出演者の方々は、利木公会堂で練習に入りました。

今回は豊橋歌舞伎、雄

踏歌舞伎、浦川歌舞伎の若手俳優参加の特別コラボレーションもあり、例年以上に力も入っていました。

また、今回は子どもが2人参加しました。そして海鳴学園院生の3人が、ふるさと研究の一環として特別出演しました。

当日、会場は満席で大盛況でした。公演は入場無料で、入口ではプログラムも配布していました。プログラムでは、本日の「演目のあらすじ」「みどころ」「役者及び役どころ」がわかり、歌舞伎を楽しめるようになっていました。

今年も「湖西太鼓ゆめ唄」が太鼓演奏で幕間を盛り上げ、鷺津民謡保存会の参加もあり、盛大に行われました。

さすが本公演、どの演目も皆さん練習の成果が演技に出ていて、とても楽しく鑑賞しました。



第40回湖西歌舞伎公演

上演演目は、スライドをご覧ください。

- ・今回の公演で唯一の、隈取化粧
- ・見得の場面や有名なセリフ
- ・狂言「釣針」をもとにしたゴモア劇
- ・義太夫・三味線、ツケ打ちなど歌舞伎らしさが表現された舞台でした。

芝居のクライマックスには、観客よりおひねりがたくさん投げ込まれて、舞台の上に花が咲いたように芝居を一層盛り上げ、観客の楽しんでいる様子が伝わってきました。

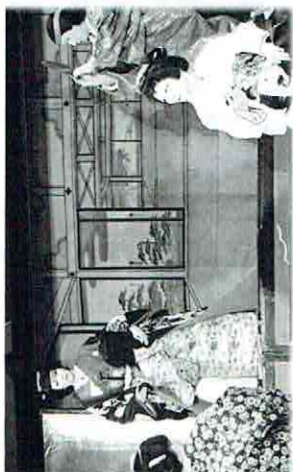
おひねりは、出演者と観客の繋がりたまもので、大歌舞伎にはないもの、すごく身近に感じられました。



寿式三番叟の一場面



釣針の一場面



伽羅先代萩の一場面



お嬢吉三の一場面

【出演者A】

最初は台詞覚えです。私たちが参加させていただいた腰元役は、単独の台詞はありませんでしたが、

- ・お入り
- ・いたませう
- ・致しましてござりまする
- ・下さりませう
- ・ハあ
- ・あれあれあれ

のたった6つの言葉でした。しかし頭にたたきこむのは大変でした。

次は、所作ですが、日常生活はほとんど着物の生活ではありません。お引きずり、座り方、立ち方、足の運び方、手の置き方など全てが非日常的なものでした。

最初は足手まといにならないようにと必死でしたが、日が経つにつれてだんだんとその場に溶け込むことができました。

本番当日は、化粧・着付け・カツラなど全て受身で、できあがってきました。リハサルや本番は落ち着いてきたかなと思います。

練習は1か月前からと言いましたが、本番が終わった数日後慰労会に参加させていただきました。



化粧



カツラ



体験出演者の練習風景

◆湖西歌舞伎へ体験出演

「体験を通して」

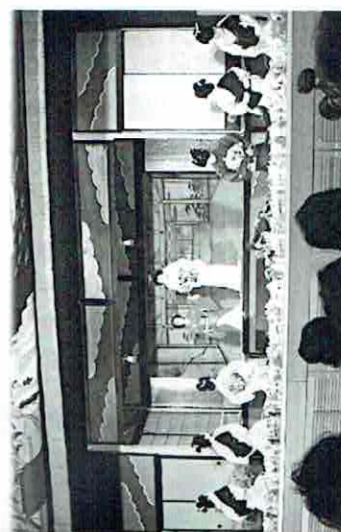
湖西歌舞伎というテーマに決まった時、代表の青島さんに話を聞かせていただきました。そのなかで「腰元が2人入れるからどうか」と言葉をなげかけられ、戸惑いのほうが多かったですが、院生の皆に後押しされて参加させてもらうことにしました。

体験出演は、「伽羅先代萩」の腰元役でした。公演にむけて1か月前から練習に入りました。1か月といえども、毎日は大変でした。

練習を見ていて師匠が張りのある良く通る声で厳しく、台詞、所作の指導をされていて、何度かやりとりしているうちに、演者も要領をのみ込み、正しく覚えていきます。一人ひとりが真剣に練習に取り組んでいて、芝居が仕上がっていくのだということを実感しました。

伽羅先代萩では幼稚園、小学3年生の2人が重要な役回りを演じていますが、よく長いセリフを覚えることができるものだと感じました。

今回は、雄踏・浦川・豊橋歌舞伎の若手の参加や友情・特別出演は院生の3人を合わせて6人でした。



舞台の上には大量のおひねり

その場でもう、来年度の外題(演目のこと)、配役などが話の中に出ていました。常に歌舞伎のことが頭の片隅にあるのだと感じて帰宅しました。

おひねりも、掛け声も、投げてもらった側は嬉しいものでした。

【出演者B】

演じる人のみでなく、多くの人々が関わって、やっと上演できることを目の当たりにしました。先ほど体験でお話しましたが、練習は1か月という短時間で仕上げるため、慣れない動作や言葉、言い回しに大変苦労しました。

また、それぞれ日々の生活があり、全員参加しての練習は数日でした。

演者だけでなく、会場や道具の準備等、毎日お世話される方の陰の大きな存在もありました。前日は、大道具や小道具の搬入、舞台作りもなかなか大変でした。青島さんをはじめとして多くの方が、知人にお手伝いを依頼されたようで、たくさんの方が協力されていました。文化協会の方々も、のぼりの準備や受付など、例年手伝われているようでした。

会員の皆さんだけでは、演技に集中することが難しいと感じました。

当日も会員の皆さんは、舞台作りや運営、演技など色々な面で気配りされ、慌ただしい時間が流れました。特に中心と



体験出演の一場面

なる青島さんは、会の運営から演者まで、いろいろな面でリーダーとして活動されている様子が伝わってきました。これも会員数の少なさが、大きく影響していると思いました。

さすが本番です。皆様方、練習の成果を発揮され、充実感や達成感にあふれていました。見学、出演した海鳴学園院生も舞台と一体になり、満足感で一杯になりました。

特に出演させていただいた者は、無事終わりほつとするとともに、貴重な体験をすることができ、関心も高まりました。

また、出演体験した者ばかりだけでなく、多くの海鳴学園院生が練習場に足を運んで見学する中で、湖西歌舞伎に関心を深めるとともに、多くの知識や現状などを知ることができました。

当日は全員が見学し感動をいただきました。そして「たくさんの人に見てもらいたいね」、「来年はおひねりをうまく投げたいな」、「保存継承していきたいね」など、次に繋げられるような会話が多くありました。

◆会員の実態

湖西歌舞伎保存会の会員は、男性5人、女性8人の計13人です。年代は20代1人、50代3人、60代8人、70代1人です。

普段の仕事は、公務員、保育士、会社員、パート、主婦などさまざまな方たちです。

メンバーの方に、お話を伺いました。

Q1：入るきっかけは、何だったのですか？

A1：①興味があつて練習を見に行つて入ることに決めました。

いです。

お話をお聞きしたところ、

次世代継承には若手会員の加人が望ましいが、会員募集は簡単ではないようです。

また、裏方業務の負担が多くて解消の方策も難しく、湖西歌舞伎のかかえる大きな課題だと感じました。

◆研究のまとめ

湖西歌舞伎についてあまり知らなかったり、観たことがなかったりということで、湖西歌舞伎のルーツや変遷について調べ、実際に体験しました。

湖西歌舞伎のルーツは、湖西市の各地域で行われていた地芝居を経て、万人講に繋がってきた農村歌舞伎が、湖西歌舞伎として公演されるようになりました。

見学や体験する中で、会員の人数不足や衣装・道具等にかかる経費、道具の保管場所、指導者の高齢化など、課題も山積しているようでした。会員の皆様方にお話を伺っても同じようなことを不安視されていました。また、広報湖西で案内され、新聞で報道されたりしているものの、認識不足だったことも感じました。

先日、浦川歌舞伎が会員・資金不足等から幕を下ろすというお話を聞きました。大変残念なことです。

湖西歌舞伎にも課題はありますが、湖西歌舞伎のルーツを大切にしながら、湖西市の伝統文化として湖西歌舞伎が保存継承されるように、微力でも私たちができることを協力していきたいと思っています。

②きらびやかな衣装・化粧にあこがれて入りたいと思いました。

Q2：次の世代に継承していくために、出演メンバーをどの様に募集していますか？

A2：①定期公演のプログラムに募集していることを載せます。

②舞台挨拶のときに入会を呼びかけています。

③知り合いやツテによって勧誘しています。

④練習を見に来てくれた人に声をかけています。

⑤子ども歌舞伎を計画します。子ども歌舞伎の経験が、社会人になってから歌舞伎に戻ってくる可能性があると考えています。

Q3：裏方の仕事が多く大変そうですが、どうされていますか？

A3：①自分の知り合いや、職場の同僚のツテで頼んでいます。足りないところは自分ですることが多くなっています。

②裏方専門の人がいればよいのですが、見つけるのは難し



体験出演者の舞台あいさつ

◆今後の取り組み

今後、湖西歌舞伎という伝統民俗芸能を誇りとして、次世代に継承できるよう、私たちができることを始めるために、「湖西歌舞伎を応援する会」をつくり、実践可能なことで応援していきたいと思っています。

一人ひとりが実践しようと考えていることを紹介します。

- ①私は、「着付けの手伝いをしようと思います」
- ②私は、「道具運びを手伝おうと思います」
- ③私は、「お茶入れを手伝おうと思います」
- ④私は、「練習場のお掃除に行こうと思います」
- ⑤私は、「パンフレットを公会堂に貼ろうと思います」
- ⑥私は、「練習場のお掃除に行こうと思います」
- ⑦私は、「衣装の縫いの手伝いをしようと思います」
- ⑧私は、「来年の公演を見に行こうと思います」
- ⑨私は、「友達を誘つて見に行こうと思います」
- ⑩私は、「10人に紹介しようと思います」
- ⑪私は、「衣装の整理を手伝おうと思います」
- ⑫私は、「裏方として参加しようと思います」
- ⑬私は、「道具の整理をしようと思います」

本当に小さい力ですが、声をかけあい学院生全員が力を合わせながら応援していきたいと思っています。

湖西歌舞伎が、湖西の伝統民俗芸能として湖西市民になじみ、次世代に継承されることを念願します。

◆参考文献&写真・画像引用

湖西歌舞伎に関する鑑定報告書……静岡女子短期大学 佐藤彰教授
 農村歌舞伎を語る……守田住夫様
 利木公会堂について……守田住夫様
 マイタウンわしづ 昭和63年3月……湖西市勢要覧
 吉原家古文書……社会教育課
 湖西市史 資料編 昭和55年3月……湖西市
 八幡諏訪神社神楽台本一覽表……湖西市
 新居の万人講……新居書留帳第3集
 湖西歌舞伎公演のあゆみ&公演実績外題一覽表……湖西歌舞伎保存会
 湖西歌舞伎定期公演プログラム・資料……湖西歌舞伎保存会
 歌舞伎……ウキペディア
 インターネット無料イラスト
 中日新聞しずおか
 静岡写真ニュース

◆話をお聞きした方・資料を提供していただいた方

山本 正寛様 守田 住夫様 鈴木 芳朗様
 青島 一郎様 高柳 逸男様

◆大学院生

落合 昌美 牧野 玲子 縣 博子 菅沼 邦子
 中尾 由紀 立石 陽子 高須 幸代 戸田 素介
 小野田 利子 仲儀 孝子 牧野 潮 佐藤 知子
 馬場 能子